

[資 料]

外来に通院するがん患者の療養生活上のニーズの起因

小西美ゆき* 佐藤まゆみ* 佐藤 禮子*
 菅原 聡美* 増島麻里子* 水野 照美**
 青山 美貴*** 濱田 由香* 猪俣 桜子****

Causal issues of needs in outpatients living with cancer

Miyuki KONISHI*, Mayumi SATO*, Reiko SATO*,
 Satomi SUGAWARA*, Mariko MASUJIMA*, Terumi MIZUNO**,
 Miki AOYAMA***, Yuka HAMADA*, Sakurako INOMATA****

要 旨

外来通院中のがん患者のニーズの内容と、ニーズが起因する事項を明らかにすることを目的に、がん専門病院外来に通院するがん患者を対象とし面接調査を行った。37名の面接記述から、「身体的、心理的、社会的な平衡が乱れた状態」、「身体的、心理的、社会的な平衡が乱れていないまたは整えられている状態」、「自ら必要とし望んでいること」、「他者に求めていること」をニーズとして抽出し、それぞれのなかで類似したものどうしを集め、ニーズが生じる原因の共通性がまとめられ、【がん診断と治療に対する気持ちと姿勢】、【身体的苦痛】、【生活を送る上での負担】、【周囲の人々との関係】、【医療者の対応】、【医療システム】、【外来通院・受診の負担】となった。社会生活を送りながら通院する外来患者、心身そして社会的に解決困難な問題を抱えるがん患者特有のニーズが明らかとなり、外来がん看護独自の看護介入の必要性が示唆された。

Key Words：がん患者，外来看護，ニーズ

I. はじめに

がんの罹患率の上昇や患者数の増加に加え、保健医療システムの変化や、人々のQOL志向の向上から、外来通院や在宅で治療を継続したり、療養生活を送るがん患者が増加している。外来通院がん患者は、治療を受けたり、自らの身体を監視しながら養生することと、地域社会での生活の営みとの両立を図る必要があり、さまざまな困難や問題¹⁾に直面しながらも、懸命に取り組んでいると推察する。本研究の目的は、外来通院中のがん

患者の療養生活上のニーズが、何に起因して生じるかをニーズの起因事項として明らかにし、外来に通院するがん患者への看護援助を検討することである。本研究では、ニーズを幅広く捉える立場から、「身体的、心理的、社会的な平衡が乱れた状態、ならびに平衡を維持するために必要としていることおよび求めていること」と定義する。

II. 研究方法

1. 対象：首都圏にあるがん専門病院の外来に通院するがん患者。
2. 調査内容：調査内容は、外来通院するがん患者のニーズを網羅するために、1994～1999年の外来がん患者に関する74文献を分析・検討した。その結果、182のニーズが得られ、がん患者の状況によって3つの領域に集約された以下のものが、調査内容である。1) がん確定診断時におけるニーズ、2) がん治療に関するニーズ、3) 通院しながら生活を送る上でのニーズ。また、患者の基本属性は、年齢、性別、疾患名、

* 千葉大学看護学部成人看護学教育研究分野

** 千葉大学大学院看護学研究科

*** 聖隷三方原病院

**** 千葉県がんセンター

* Department of Adult Nursing, School of Nursing,
Chiba University

** Graduate School of Nursing, Chiba University

*** Seirei Mikatahara Hospital

**** Chiba Cancer Center

受けている治療内容である。

3. 調査方法および時期：方法は、インタビューガイドに基づく半構成的面接調査ならびに診療記録・看護記録からの患者の属性調査であり、調査時期は、2000年3月である。
4. 調査手順：1) がん専門病院の外来全11診療科の受診予定患者より、心身の状況から面接の可能な患者を、施設スタッフの助言を受けて選出する。2) 患者の来院時に研究趣旨書をもとに研究目的と方法を説明し、研究参加の同意を得る。3) 同意が得られた者に対し、診療の前後の時間で面接を行う。面接は、対象のプライバシー保護に努め、面接内容は、許可を得て筆記する。
5. 分析方法：1) 面接の記述資料を熟読し、本研究のニードの定義に基づき、ニードの表現方法に注目し、以下の4群にわけて外来通院中のがん患者のニードを抽出する。(1)身体的、心理的、社会的な平衡が乱れた状態、(2)ニードが満たされた状態である、平衡が乱れていないまたは整えられている状態。また、平衡を維持するために、(3)自ら必要とし望んでいること、(4)他者に求めていること。2) (1)~(4)の群ごとに、ニードの内容の類似しているものを集め、集まったまとまりを表す表題を付け、さらに表題の意味が関連しているものどうしを集め、大表題を付ける。3) 全表題が表している、ニードを生じさせる原因が共通しているものどうしを集め、端的な言葉で表し、ニードの起因事項とする。

Ⅲ. 結 果

1. 対象の概要

対象は、37名で、男性22名、女性15名であり、年齢は、25~77歳で、平均 58.5 ± 13.4 歳であった。疾患別対象数は、頭頸部癌6名、造血器腫瘍5名、子宮癌5名、乳癌5名、泌尿器癌4名、肝細胞癌3名、胃癌、肺癌、骨肉腫、卵巣癌各2名、脳腫瘍1名であった。現在受けている治療別では、化学療法が12名、放射線療法が5名であり、治療を終了して経過観察中の者が20名であった。

2. 外来に通院するがん患者が療養生活を送る上での特有のニード

外来に通院するがん患者が療養生活を送る上でのニードは、ニードの表現方法ごとに抽出すると、「身体的、心理的、社会的な平衡が乱れた状態」は140、「身体的、心理的、社会的な平衡が乱れていないまたは整えられている状態」は77、「自ら

必要とし望んでいること」は30、そして「他者に求めていること」は43が得られた。これらはそれぞれ、意味内容により表題または大表題で表される内容にまとまり、さらに、ニードが生じるもととなった原因の共通性によって、【がん診断と治療に対する気持ちと姿勢に起因するニード】、【身体的苦痛に起因するニード】、【生活を送る上での負担に起因するニード】、【周囲の人々との関係に起因するニード】、【医療者の対応に起因するニード】、【医療システムに起因するニード】、そして【外来通院・受診の負担に起因するニード】に集約された。各ニードの起因事項別に、表現されたニードを、「平衡が乱れた状態」、「平衡が乱れていないまたは整えられている状態」として示された内容は表1に、「自ら必要とし望んでいること」、「他者に求めていること」として示された内容は表2に示す通りである。

Ⅳ. 考 察

1. 外来に通院するがん患者のニードが生じる原因

外来に通院するがん患者に生じるニードは、がん患者が困難や問題と捉えている事柄や背景にその原因があり、がんという疾患そのものや治療による心理的影響や身体的苦痛、さらに生活や周囲の人々との関係まで広範囲にわたる。その内容は特有であり、診断・病名告知や治療によって多大な苦痛を受けるがん患者の深刻さの特有性と、疾患がもつ社会的な意味にも独自の対処を必要とする²⁾外来患者の自立の特有性を含んでいる。ニードの内容からは、外来がん患者が、家庭生活・社会生活の複雑な状況下で、各ニードが生じる起因事項の相互影響によって、解決困難な問題を抱えているであろうことが推察できる。外来看護においては、このような患者のニードを的確にアセスメントし、患者自らが自立した生活の営みとして問題に対処できるよう、具体的で現実的な援助をすることが必要であると考えられる。

2. 外来通院がん患者のニードに対する看護援助 1) “がん診断と治療に対する気持ちと姿勢”に起因するニードへの援助

がん診断を巡っては、診断が確定する前から、そして治療を終えてもなお、常にがんの脅威にさらされる患者の姿が示された。また、患者の身体をよりよい状態にするための望ましい手段であるはずの治療に対しても、否定的な感情を抱いたり、治療の結果に圧倒され得ることが明らかとなった。これらの気持ちや姿勢は、配慮され、支持される

表1 外来通院がん患者の平衡が乱れた状態・整えられている状態として表現されたニード

ニードの ニードの 起因事項	ニードの 表現方法	身体的, 心理的, 社会的な平衡が乱れた状態	平衡が乱れていない/整えられている状態
がん診断と治療に対する 気持ちと姿勢		・ 診断までの間落ち着かない ・ がんに圧倒される ・ 治療を受けられない間のがんの進行が不安である ・ 治療に立ち向かえない ・ いつまでもがんの脅威がつきまとう ・ 治療の影響に気持ちが圧される	・ 告知された気持ちの乱れに医師が配慮してくれた ・ 生命の保証の言葉に安心する ・ がんと言われないことで穏やかに過ごす ・ 早く治療できてよかった ・ 身体が楽になると心も楽になる
身体的苦痛		・ がん/治療のために身体的苦痛がある	・ 治療の副作用がないので困らない ・ 身体の変化への対処法を身につけると安心する
生活を送る上での負担		・ がん治療の影響で生活の不都合がある ・ 仕事ができなくなりつらい ・ 今までと同じように仕事しなければならない ・ 経済的に負担がある	・ 家では好きなように生活できる ・ 治療の先の見通しがわかると大丈夫 ・ 治療の副作用はあっても対応できている ・ 入院中にもらったパンフレットが役立つ ・ 通院することで心身のリズムがつく ・ 仕事ができることが嬉しい
周囲の人々との関係		・ 家族とつらさを分かち合えない ・ 家族の中の自分の立場が辛い ・ がんに対する民間療法を勧められ面倒に感じる ・ 同病者に影響されて心が揺れる ・ 同病者との距離の取り方に悩む ・ 周囲の人との距離を感じる ・ 心身のつらいときに人目が気になる	・ 家族が理解し協力してくれる ・ 同病者と相談できることがよい ・ 人とふれあう楽しみがある
医療者の対応		・ 看護婦(士)に相談できない ・ 必要な情報や説明が看護婦(士)から得られない ・ 医師から十分な説明が得られない ・ 医師とわかり合えない	・ 看護婦(士)の対応が信頼できる ・ 看護婦(士)が知りたい情報をくれる ・ 看護婦(士)が話を聞いてくれると楽になる ・ 看護婦(士)が自分のことをわかってくれることが嬉しい ・ 看護婦(士)が親切でやさしいことが嬉しい ・ 医師の人間性を信頼できる・医師が支えてくれる ・ 医療者の言葉で気持ちが落ち着く ・ 優れた機器の説明で気持ちが楽になる
医療システム		・ 相談のしかたがわからない ・ 緊急時に頼る先の保証がない ・ 他院と協力して診療してもらえない	・ 専門病院を紹介されて安心する ・ いつでも病院に連絡できることで安心する ・ 病診連携がとれていてよい
外来通院・受診の負担		・ 外来への通院過程が負担である ・ 外来の待合い時間が負担である ・ 外来受診時間が生活を圧迫する ・ 治療の時間ロスが多い ・ 通院のための病院設備が整っていない	・ 外来が快適でよい ・ 外来設備が整っていてよい

表2 外来通院がん患者の自ら必要とし望んでいること・他者に求めていることとして表現されたニーズ

ニーズの 起因事項	ニーズの 表現方法	自ら必要とし望んでいること	他者に求めていること
がん診断と治療に対する 気持ちと姿勢		・よくなりたい ・できるうちにやりたいことをやっておきたい ・これまでの自負あることを続けたい ・がんばっている同病者を見るともっとがんばりたい ・できるだけひとりでがんばりたい ・不安が増すので多くを知りすぎたくない ・がんなら専門病院で診療を受けたい ・治療についての最新の情報を知る機会がほしい	・きちんと検査して正しく診断してほしい ・悪い検査結果でもはっきり言ってほしい ・治療に対する不安を軽減してほしい
身体的苦痛		・副作用が嫌なので鎮痛剤使用をやめたい	・がんによる身体の苦痛を取ってほしい ・化学療法で調子の悪いときは入院させてほしい
生活を送る上での負担		・入院せずに家で過ごしたい ・日常生活上の質問をしたい	・仕事調整のために診療所要時間を事前に知らせてほしい ・受診にかかる費用をあらかじめ知らせてほしい ・ひとりひとりに合わせた生活のアドバイスがほしい ・些細なことを看護婦（士）に聞けるようにしてほしい
周囲の人々との関係		・家族に相談したいときにしたい ・同病者から具体的な話を聞きたい ・他の患者のために役に立ちたい ・同病者とは深く付き合わずよいところだけ吸収したい ・がんと知られたくない	・他患と情報交換できる場がほしい ・身体に障害がある苦労や努力を同僚にわかってほしい
医療者の対応		(抽出なし)	・看護の機能を向上させてほしい ・対応をよくしてほしい ・患者のつらい状態をわかってほしい ・患者の成長を見守ってほしい ・気持ちをほぐすように一声かけてほしい ・適切な説明をしてほしい ・自分で決めるための助言がほしい
医療システム		(抽出なし)	・必要なときに相談できるシステムがほしい ・気楽に看護婦（士）のカウンセリングを受けられるようにしてほしい
外来通院・受診の負担		・長い待ち時間を有効に使いたい	・長時間かかる治療を効率よくしてほしい ・明るい雰囲気の外来にしてほしい ・待合室を快適にしてほしい

ことを患者が実感できることによって変わり得るものである。繰り返し発生する様々な問題に対しては、継続的援助³⁾を提供する外来看護の役割と援助内容を患者に示し、実践する必要がある。また、患者は、がん診断や治療による深刻な気持ちを抱く一方で、前向きに、積極的に生きたいと自ら望む姿が認められる。こうした姿勢は、援助として肯定的に評価してフィードバックする必要がある。患者の好ましい姿勢を保証することは、患者の主体性を高める上で重要な援助となると考える。

2) “身体的苦痛”と“生活を送る上での負担” に起因するニードへの援助

がん自体あるいは治療の侵襲や副作用は、患者に苦痛を与え、身体的、心理的、社会的な平衡を乱す。この苦痛を消失・緩和させることが第一義であるが、それでもなお取り去ることができないときには、その苦痛に対処する適切な方法を考える必要がある。生活を送る上での負担があっても、患者はその負担への対応や見通しがわかると安定し、家で自由に生活することを望んだ。生活を送る上での負担に起因して患者が求める内容は、よりよい生活を送るための情報を求めるニードであるといえる。効果的な情報提供の方法は、患者が必要とする情報の内容のうち、共通性と個別性のそれぞれに高いものを見極め、共通したものは集団指導や資料化し、個別のものは相談の機会や場を設置するなどが考えられ、より効果的なあり方を検討することが必要である。

3) “周囲の人々との関係”に起因するニードへの援助

家族、同病者をはじめ、患者を取り巻く周囲の人々との関係は、患者にとって良好に保たれば大きな支えとなる重要な存在である⁴⁾が、本研究の結果から、患者が孤独や否定的な影響を感じ取ることが明らかであった。患者は、平衡が乱れた状態を何とかしようと、他者と距離をおいたり、感情を抑圧することで自らの平衡を保っていることが推測された。看護が関係そのものに直接介入することは困難であるが、患者と周囲の人々との望ましい関係のあり方を共に考え、関係構築のための意思表示や感情表出の実行を患者に働きかけることで、改善を図ることができると考える。

4) “医療者の対応”、“医療システム”、“外来通院・受診の負担”に起因するニードへの援助 医療者の対応では、患者を理解し尊重する姿勢

と、必要な情報を適切に提供することが強く求められた。患者と共有できる時間が短く、かわかりが断続的になりがちな外来看護においては、看護婦(士)ひとりひとりの対応、適時の必要な情報提供が不可欠である。患者の背景や経過に沿って適切に対応するためには、外来看護をプライマリナーシング制⁵⁾とすることが考えられる。医療システムに起因するニードは、患者が必要と感じるときに受診・相談できるシステムを強く求める内容であるといえる。このことは、社会生活を送りながら療養する外来がん患者の特徴を如実に示しているといえ、診療や相談の時間、場所およびサービス提供方式について、多様な可能性を模索する必要があると考える。外来通院・受診の負担に起因するニードは、通院や受診に伴う身体的苦痛と生活への時間的圧迫、外来設備に対する要望を表している。時間予約制の導入は必須と考えられ、アメニティの向上などの努力を含め、さらなる追求が必要とされるといえる。

V. おわりに

外来に通院するがん患者の療養生活を送る上でのニードの構成を、ニードの起因と表現方法より明らかにした。がん患者、外来患者特有の問題や背景に起因したニードが見出され、がん患者を対象にした外来看護独自の看護介入の必要性が示唆される。

(本研究は、平成11～14年度 文部科学研究費補助金 基盤研究(B)(2)の一部である。)

文 献

- 1) 数間恵子：がん慢性期患者の継続看護 在宅療養指導料活用の視点から。看護学雑誌, 59(7), 652—658, 1995.
- 2) 吉田智美：外来通院中の患者への看護。別冊ナーシング・トゥデイ10, 117—127, 1997.
- 3) 季羽倭文子：がん告知後のケア。臨牀看護, 24(11), 1654—1661, 1998.
- 4) 遠藤恵美子：がん看護の視点からのソーシャルサポート その理論的裏づけ。がん看護, 5(3), 178—181, 2000.
- 5) 原幸枝, 武田美登理：がん患者への継続看護が契機となった外来プライマリナーシングへの移行 日本赤十字医療センター外科外来の取り組み。看護学雑誌, 59(7), 648—651, 1995.